

私の満州

神奈川県 竹之内 忠 男

戦後六十年が夢のように過ぎ去りました。

私は、昭和二（一九二七）年三月、関東州貔子河（現在の大連市）で生まれ、以来十八年間に満州で過ごしました。大連、三十里堡、奉天（瀋陽）、蓋平、鞍山など六カ所に住み、育ちました。五、六歳の頃住んだ大連は東洋一と言われた埠頭を持ち、見る建物はすべてレンガ造りか石造りでしたから、日本を知らない日本人として木造建築などは想像したこともありませんでした。学校、病院、役所、ホテルなど大きな建物ばかりで、こういうものだと思っていました。大連は大陸に渡る人がほとんど第一歩を印す入り口で、当時から多くの日本人が住み、病院、学校、遊園地、海水浴場などをはじめ諸施設、繁華街なども整っていました。父は明治二十六（一八九三）年三月生れ、鹿兒

す。その時の喜ぶ兵士たちの笑顔が印象に残っています。

やがて昭和十二年支那事変勃発、相変わらず北満へ、東満へ、北へ北へと軍用列車は走りましたが、時々、白衣の傷病兵たちを乗せた列車が、逆に北から南へ向かうのも見るようになりました。傷ついた兵士の内地送還、もしくは凱旋する兵士だったかと思えます。次第に増えて来るようにも感じました。「義人」と言われ、歌も作られた村上象太郎氏が内地に向かう列車を見送ったことも記憶にあります。私はまだ十歳そこそこの子供で、ただ、勇ましい戦果を聞かされるだけで、戦争の実態など分かるはずありません。「勝った、勝った」の報道を無条件に信じ、勉強も運動もすべてお国のためと言われて育った軍国少年でした。

昭和十四年に奉天工業学校に入學しました。当時、日本軍は中国大陸から、さらに戦争資源の確保のために南方に進出、破竹の勢いで戦線を拡大して行きました。満州での私たちの生活は特に不

島市大滝小学校から鹿兒島一中に進みました。仕事は通信省官吏（郵便局勤務）で、都会の中央局では中堅幹部、小さな田舎の局では局長を務めていました。その間、昭和十一年前後だと思いますが、綏中（山海関と葫蘆島の間）、穆稜（綏芬河の北四十キロ）の二カ所の軍事郵便局長として計二年近く派遣されていました。いずれも国境付近なので、そこにも日本軍が駐屯していたということでした。

父からは、兵士たちは故郷からの手紙を一日千秋の思いで待っているのだと言う話をよく聞かされました。

私は、昭和八年小学校入学、以後は父が郵便局勤務だったため、主として南満地区でしたが六回にわたって転居・転校しました。

昭和十年、十一年頃は三十里堡に住んでいましたが、毎晩のようによく駅に行つて、北へ向かう軍用列車に乗った兵士を「日の丸」の旗を片手に見送つたり、慰問袋を窓から渡したりしたもので

自由を感じることもなく、内地よりも裕福でした。

昭和十六年になると、日本の戦線拡大と、それを良く見ない米、英、中、蘭の間で摩擦が生じ、ついに最後の戦争に突入してしまいました。彼等は連合して日本を負かすことで意見の一致を見たのです。これはA B C D包囲網と言われました。もともと石油、鉄鋼の資源のない日本です。今にして思えば資源が枯渇し戦力が劣ることは火を見るより明らかでした。

また、国策として、東満、北満地区に開拓団、青少年義勇軍という名目で、多くの日本人が送り込まれました。現地にいる子女の教育のため、私が卒業した奉天春日小学校からもベテランの先生たちが千振村の校長とか、濱江省の教育主事として派遣されたことも聞きました。これは戦後、本人たちから聞いた話です。

健康な男子は根こそぎ軍に引つ張られ、留守を守るのは無防備の老人、婦女子ばかりです。八月九日のソ連軍の侵攻によりこれら無防備の人達が、

真つ先にあまた犠牲になったことは悲惨な記録として多く語られております。

次弟の智孝は昭和二十年、鞍山中学三年で、終戦の二カ月前に、病弱者と滑空班員を除く学年全員が勤労働員で東満綏化（ハルピンの北約百キロ）周辺の宮城県からの青葉開拓団に派遣され、終戦と同時に命からがら鞍山に帰って来ています。どういうわけか顔は、お多福のように膨れ上がっていたことは、引き揚げ後、母から聞いた話です。

私は、昭和十九年四月、満鉄蘇家屯電気区に入社（勤務地は鞍山）、仕事は通信機関係で主として交換器の補修点検という決して重労働ではない、どちらかというと楽な仕事でした。昭和十九年七月、初めて中国成都からB 29による鞍山爆撃を体験しました。奉天に向かう連京線の線路をはじめ、線路脇に平行に架線された通信線も、さらに線路西側一帯の広大な敷地にある昭和製鋼所にも何百発と爆弾が投下され、鞍山、奉天間の交通、通信、その他の連絡網は一切機能を失いました。

昭和二十年四月、海軍特別幹部練習生として鎮海海兵団に、その後電探技術習得のため神奈川県藤沢にできた海軍電測学校へ移動、そこで終戦を迎えました。隣にあった小園大佐指揮する第一相模野航空隊からは、十五日以降も飛行機が飛び立ち「我々は、絶対に降伏はしない！」と言う趣旨のビラをまき散らすのを見ました。また行く先は分からないが飛び立ったまま帰って来ない飛行機も何機かいたようでした。

私の分隊でも教員室で酒の勢いを借りて日本刀を振り回す若い下士官がいましたが、怖いもの見たさで恐る恐る見たものです。

四、五日経って班長から復員証明書を発行するから、全員帰省先を書くように言われました。私は満州に帰るつもりだったので「満州国鞍山市北九条町二番地」と書いて提出すると、「朝鮮には渡れないらしいので、国内の帰省先も併記せよ」とのこと。就学前六歳の時に一度母に連れられて母の実家を訪ねたことがあったので、記憶をたどり

憲兵隊からの命令だったと思いますが、まず何はさておき奉天との連絡をということ、満鉄の無線通信所に非常電源用のバッテリーを運べと下令され、「誰が行くか」「ハイッ僕が行きます！」と、私は空襲警報が解除されていない中を、大きな大車に一個三十キロほどのバッテリーを八個か十個積んで一キロ道の程を歩きました。途中ではあちこちから「危ない！ 止まれ！」

「防空壕に入れ！」と声が掛りましたが、使命の重大さを思い無我夢中で無事に目的地に着きました。この時十七歳と四カ月、爆弾の怖さなど体験したこともなく、怖いとも何とも思いませんでした。

戦局の劣性は日に日にその度合いを増し、以来、日本内地は勿論のこと、鞍山も奉天も空襲にさらされるようになりました。国を守るためには我々も軍隊に行かなくてはと、十四、五歳の少年までもが、陸軍に、海軍にと志願して巣立って行きました。

ながらそこも書きました。

藤沢の駅を発つたのは二十七日だったと思います。復員列車ということで途中は余り停車しなかった記憶があります。広島に着き、ここに新型爆弾が落されたということは知っていましたが、車窓から見える風景は一面焼野原で、駅は閑散としていたようでした。下関まで来ると、しばらく停車したので体を伸ばしに三三五五ホームに降りました。

ホームは復員兵で溢れ返り、あちこちで朝鮮、満州に渡るにはどうすればいいか、「闇のジャンクがあるらしいが物凄い金を取られるらしい」「京城（ソウル）までは何とかたどりつけたが、その先は行けずに引き返して来た」「新義州で暴動に遭い、抵抗して殺されたらしい」などなど、聞こえて来るのは物騒な話ばかりでした。

誰か知っている者はいないかと見回すが、皆服装が似ているためそれかなわず、結局、鹿児島県志布志町（母の実家）に落ち着きました。町は

人口三万足らずの漁港でしたが、戦時中は連合艦隊が勢揃いすることもあり、海軍さんの町として栄えた町でした。しかし私にとっては町を歩いていてもすぐに建物や土蔵に突き当たる、建物はほとんど木造ばかり、役場に行っても廊下はガタピシの板張り、列車は真っ黒な煤だらけで、小さく速度も遅くガタガタの感じ、何もかもが今まで住んでいた満州とは違うため、慣れるまで半年位かかったと思います。

半年程経った頃から、あちこちで「満州から帰って来た」という話を聞くようになり、「どこからですか?」「奉天はどうでした?」「鞍山の様子は?」と必死で聞き回ったものです。夏の夜は、よく近くの大きな石橋の上に立って、北斗七星を眺めては、実家の安否に思いを致し、涙したものでした。

昭和二十年末から鹿屋に進駐して来た米軍の宿舎で労務者として一年足らず働きました。与えられた仕事は海兵隊病院で軍医の手伝い、将校食堂

験していない私としては、やはり話として聞くしありませんでした。

あれから六十年、いろいろな苦勞もしてきましたつもりですが、全満各地、特に僻地の開拓団などに住み、命からがら都会に集まってきた多くの人たちの体験談や回想記を読むたびに、それらに比べると、私の場合はまだまだ恵まれた方で苦勞の部類には入らないと思います。

また、これらすべての体験者もすでに高齢となり、日一日その数は減って行きます。様々な機会を通じて、語り合い、記録に残していきたいと思っている毎日です。戦争を放棄した今の日本を有り難いと思いつつ、どうしても気になる明日の日本、これは八十路も間近かに迫った老人のたわごとでしょうか。

職歴は満鉄で一年、軍歴は海軍で四カ月、終戦は内地で迎えたため引き揚げでもない、今となってはどこからも相手にされない当時十八歳の若者も、早七十八歳になりました。それでも戦争と平

での配膳係などでしたが、彼等の機動力、資材、武器、食糧などを目の当たりにした時、日本のそれとの余りの違いに驚くと同時に戦争とは何かを痛感したものです。広い校庭の一隅に二十畳程の鉄の網で囲った小屋があり、中では陸軍の将校風の人が歩いていました。

昭和二十一年八月十四日、雨の降る夜でしたが、敗戦後一年目に家族五人が揃って帰って来ました。夢のようでした。一番下の弟正博は四歳五カ月、自分より大きなリュックを担いでいた姿、全員が疲れきった顔の中にもやはり安堵した面持ちは今も目に焼き付いています。

親や次弟から聞いた話ですが、家のすぐ近くに鞍山女学校があり、その奪い合いのために八路軍と国府軍との銃撃戦が連日続き、近所の知り合いの人が犠牲になったとか、満人の暴徒も襲ってきたことがあったが、幸い日本人が多く鉄筋の満鉄社宅でもあり、治安も徹底していたのでその点は助かった、などいろいろ聞きました。しかし体

和について、また子孫の幸せについて、日夜考えております。

【解説】

体験記執筆者の父は、通信省官吏で、各地の局長を務めていた関係で、執筆者も昭和二年三月、大連市で生まれ、以来十八年間を満州で過ごし、大連をはじめ三十里堡、奉天、蓋平、鞍山などに住み、主として南満地区の町を六回にわたって転居・転校している。

そして、昭和十九年四月、満鉄の蘇家屯電気区に入社、鞍山で通信交換器の補修点検などの業務を担当した。当時、中国成都からB29による鞍山爆撃が始まり、昭和十九年七月二十九日、八月四日、九月八日、九月二十六日と鞍山は製鋼所のあった関係で四回にわたり爆撃を受けている。七月二十九日の初回の爆撃では、奉天に向かう連京線の線路をはじめ、線路脇に平行に架線された通信線など、鞍山、奉天間の交通、通信、その他の連

絡網は一切機能を失い、これの補修のため、非常電源用のバッテリーの運搬などの体験をする。

そのような生活の中で、昭和二十年四月、海軍特別幹部練習生として鎮海海兵団に入団する。その後、電探技術習得のため神奈川県藤沢に新設された海軍電測学校へ入学、そこで終戦を迎える。

この海軍電測学校は当時米国軍より遅れをとっていた電波探知機の技術を教育する学校で、海兵団入団者や海軍予備学生などから派遣され、特に緊急の艦船電探技術習得者養成の学校であった。

執筆者は、ここで終戦を迎えているが、ここは海軍の厚木航空隊に近く、最後まで終戦に反対する気運の高かった航空基地であった。小園大佐指揮する第一相模野航空隊から、終戦後も飛行機が飛び立ち「我々は、絶対に降伏はしない！」という趣旨のビラを撒くのを見た体験も記している。

満州滞在の長かった執筆者は、内地在住者とは異なった終戦後の体験をしている。復員証明書に記載する帰省先を「満州国鞍山市」と書くも帰省

できる筈もなく、六歳の時に母に連れられてきた記憶のある母の実家を帰省先にして、藤沢から下関に向かう。ここでは朝鮮、満州からの復員、引揚者で溢れ、聞き取るのは現地の混乱と悲惨さ、そして詳しい情報のないことであったという。

結局、母の実家である鹿児島県志布志町に落ち着き、何もかもが今まで住んでいた満州とは違い、生活などに慣れるまで半年位かかった。

その間も、あちこちで満州、鞍山の様子などを必死で聞き回つても情報が得られぬままに、終戦から一年を経過した昭和二十一年八月十四日、雨の降る夜、家族五人が揃って帰って来る。夢のようだったという。